

espress.
p
mf
f

高松交響楽団

第 117 回 定期演奏会

感動の メロディズム

オール・チャイコフスキー



2017 6.11 日 開演 14:00

香川県県民ホール 大ホール
[レクザムホール]

主催：高松交響楽団 (TSO)
後援：香川県、高松市
楽譜協力：トヨタミュージックライブラリー

Pyotr Ilyich
Tchaikovsky
(1840-1893)



皆様、ようこそお越し下さいました。

今回の演奏会では、ロシア最高峰の作曲家の一人、チャイコフスキーの作品を取り上げ、勇壮なスラヴ行進曲、ロシア情緒あふれるヴァイオリン協奏曲、生涯最後の渾身の大作「悲愴」、いずれも音楽史に燦然と輝く名曲をお贈り致します。

指揮には、香川県さぬき市出身で、国内外で広く活躍する松下京介氏を、ヴァイオリニストには、2015年・チャイコフスキー国際コンクールで第3位の榮譽に輝いたハーイック・カザジャン氏を、当団として初めて招聘いたしました。

チャイコフスキーの音楽の素晴らしさ・真髄は、何よりもその「メロディ」にあります。「感動のメロディズム」どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

Program

スラヴ行進曲

この曲の初演当初の題名は「スラヴ民謡にもとづくセルビア・ロシア行進曲」でした。1876年に起きたブルガリアの民族運動を発端にロシアとトルコの戦争が勃発した戦争の負傷兵のための慈善演奏会で初演されたのがこの曲です。わずか5日で作曲されたといわれています。初演は大成功でした。

エキゾチックな魅力と、エネルギーあふれる迫力が、メリハリよくまとまり、現在でも大変人気の高い曲です。

曲は、いくつかのセルビア（南スラヴ）民謡から成り立っています。葬送行進曲風の「太陽は明るく輝かず」に始まり、流麗な「懐かしいセルビアの戸口」、勇ましい「彼は敵の銃を恐れない」の3つがドラマティックに折り合わされ。最後にロシア国歌を堂々と歌い上げて、スラヴ民族の勝利を示すように全曲を結びます。

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調

今でこそ、ベートーヴェン・ブラームス・メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲と並び、4大ヴァイオリン協奏曲とも言われることもあるこの曲ですが、作曲当初は受難続きでした。作曲後、当時ロシアで最も有名なヴァイオリニストに楽譜を見せると「演奏不可能」と吐き捨てられ、ようやく初演にこぎつけると、当時の最も有名な音楽評論家から「悪臭を放つ音楽」とこき下ろされる始末でした。しかし、初演を担当したプロツキーというヴァイオリニストが、粘り強くこの曲を取り上げ演奏を続けるうちに、徐々に評判は高まり、いつしか、「悪臭を放つ音楽」ではなく「ロシアの薫り豊かな音楽」、「演奏不可能な曲」ではなく「ヴァイオリンの演奏技巧を余すことなく堪能できる曲」として、広く認められるに至りました。

第1楽章 Allegro moderato - Moderato assai この協奏曲全体の実に半分を占める、スケールの大きい音楽です。曲は、問い掛けるような第1ヴァイオリンの主題から始まります。独奏ヴァイオリンが入る前から期待が高まります。その後、満を持して独奏ヴァイオリンが入ってきて、軽く腕ならしめるようにカデンツァ風音楽を弾いた後、主部に入っていきます。主部では独奏ヴァイオリンがロマンティックな息遣いにあふれたのびやかな第1主題を演奏します。第2主題はしみじみとした陶酔的な表情を持つものです。展開部は、華やかでダイナミックな響きで極めて印象的に始まります。独奏ヴァイオリンの名人技を中心に華やかに展開された後、カデンツァが入ります。カデンツァはチャイコフスキー自身が作曲しています。その後、再現部になり、両主題が華麗に再現されます。コーダも大変力強く、全曲のエンディング？と思わせるような盛り上がりを見せて結ばれます。実演では、この部分で拍手が入ることが多いですが、それも当然のような華やかなコーダです。

第2楽章 Canzonetta : Andante この楽章のタイトル「カンツォネッタ」を日本語に訳すと「小さな歌」です。この題の通り、ヴァイオリンが存分に歌い上げる音楽です。木管楽器とホルンのみの簡素なアンサンブルによる序奏に続き、ヴァイオリン独奏によって、哀切感たっぷりにロシア的な歌が奏でられます。哀しいだけでは無く、どこか「憧れ」の様な感情も抱かせる見事なメロディーです。中間部では、音の動きの起伏が大きくなり、情熱的になります。再度最初の部分に戻り、静まり返っていきませんが…。

第3楽章 Finale: Allegro Vivacissimo 突然、エネルギーあふれる音楽が始まります。第1主題は、コサック・ダンスのような2拍子の激しい踊りの音楽です。ひとしきり、跳ね回る様な激しい音楽が続き、一区切りした後、今度は、独奏ヴァイオリンが低音域でベタリと、素朴な第2主題を奏でます。第1主題が跳ね回る音楽なら、第2主題は地面を踏みしめ歩くような音楽です。それが巧妙に変奏されながら、徐々に第1主題の激しい踊りに引き戻されていきます。そして第1主題による狂喜乱舞のようなコーダとなり、興奮のうちに最後の音へなだれこみます。

交響曲第6番 口短調「悲愴」

チャイコフスキーの生涯最後の大作にして最高傑作のひとつであるこの曲は、お聴きになれば分かる通り、あまりにも斬新で謎めいた構成をしています。また、チャイコフスキーは、この曲を書きあげ初演してから、わずか9日後、レストランで飲んだ生水が原因で、当時は死病と恐れられたコレラにかかり、あっけなく53年の生涯を終えてしまいます。その様な事も相まって、「この曲は遺言ではないか」とか、様々な憶測が、現在に至るまで為されています。

実際のところどうだったのかは闇の中ですが、彼は、命を賭けるほどの相当な思いと渾身の力を込めてこの曲の作曲に取り組んだことは確かです。楽譜上に、*fff*（強く強く強く強く）から *pppppp*（弱く弱く弱く弱く弱く弱く）までという極端な強弱指示がなされている事からも、気持ちの振れ幅、思いの強さがうかがえます。

ところで、この曲のサブタイトル「悲愴」は、フランス語「パセティーク」の日本語訳ですが、チャイコフスキーの母国語ロシア語では「パテティチェスカヤ」という言葉になります。「パテティチェスカヤ」という言葉には、単に悲しく愴ましいだけではなく「情熱的な、感情のこもった」という意味合いが含まれますので、この曲は、チャイコフスキーの中に渦巻く、様々な情熱・感情が音楽として表出したものと言えるわけです。彼の「パテティチェスカヤ」なる渾身のシンフォニーを存分にご堪能ください。

第1楽章 Adagio - Allegro non troppo 虚ろなコントラバス、地を這うファゴット、濁いた音色のヴィオラと続きます。オーケストラの花形楽器であるヴァイオリン等は、序奏部では、なんと一音たりとも発しません。ただならぬ始まり方、まさに「悲愴」です。序奏にやや動きを加えて、主部（第1主題）に入ります。だんだん楽器が増えてゆき、大きく盛り上がりつつ第2主題に移りますが、この甘美で陶酔的な主題は、間違いなく皆さんの心をグッと掴むことでしょう。そして、クラリネットの柔らかな音色が夢の世界へ誘います。これで終われたらどんなに幸せでしょう。しかし、この楽章はここでは終わりません。そして、この後に続く音楽こそが、この曲が「悲愴」いや「パテティチェスカヤ」である所以かも知れません。どういうことなのか、それは聴いてみてください。

第2楽章 Allegro con grazia この楽章は、チャイコフスキーが得意としたワルツです。普通のワルツは3拍子「ズン チャッ チャ」ですが、このワルツは5拍子「ズン チャズン チャッ チャ」です。美しい音楽ですが、妙な拍子のために、「踊りたいのに上手く踊れない」ようなもどかしさがあります。中間部は、優雅さと物悲しさが同居する何とも言えない雰囲気です。再びワルツに戻りますが、舞踏会場からどんでん人が帰りはじめ、残された一人が淋しくため息をつくように楽章は終わります。

第3楽章 Allegro molto vivace イタリアの民族舞曲「タランテラ」風に軽快に始まります。それとは別に、オーボエから飛び出した、元気な「行進曲」の断片が様々な楽器で飛び交い続け、やがてクラリネットによって行進曲の全てが奏でられます。「タランテラ」と「行進曲」が並行して曲は進みますが、弦楽器と木管楽器が交互に旋風を起こすと、行進曲がタランテラを飲み込んで怪物化し、元気を通り越して、鬼気迫るほどになります。「悲愴」と銘打たれたこの交響曲中、非常に異質な楽章ですが、ここは深く考えずに、この楽章の興奮に身を委ねてください。

第4楽章 Finale. Adagio lamentoso 非常に独創的なフィナーレです。このフィナーレについてはいかなる説明も不要かと思しますので書きません。聴いて感じてください。ただ、初演のエピソードだけ紹介させていただきます。初演の際、聴衆には、あまりにも独創的すぎるこの曲、特にフィナーレの真価が伝わらず不評に終わりましたが、チャイコフスキーが世を去った後再演された際には、最後の音が鳴り止んだ後も、静寂と唸り泣きが続いたそうです。そしてこの時、誰もが疑いなくこの曲の真価を認めたのでした。

【高響倶楽部法人会員】

社会福祉法人 サマリヤ
香川トヨペット 株式会社
ネットヨタ高松 株式会社



スタインウェイピアノ 香川県正邦特約店
有限会社 **高松ピアノ工房**
ピアノ・オーバーホール・調律・修理・レンタル
■ショールーム/
高松市木太町7区3685 TEL:087-833-6049
■工場/
高松市木太町7区3464 TEL:087-833-9433

各種行事の記録ビデオ制作をはじめ映像情報コンテンツの制作なら

株式会社 **よんでんメディアワークス**

TEL (087) 818-1071
FAX (087) 818-1072
URL <http://www.ymw.co.jp>
E-mail info@ymw.co.jp



楽器堂
GAKKIDO CORPORATION
www.gakkido.jp



いい音楽との出会いを大切にします
ピアノ 管楽器 弦楽器 キターベース 打楽器 及び楽器販売
楽器堂オーバサイオンモール高松店
高松市香西本町1-1イオンモール高松1F
TEL : 087-832-8016

楽器に関するご相談、何でも受付中です！

Profile



指揮 松下 京介 *Kyosuke Matsushita*

香川県さぬき市出身。高松第一高校音楽科、昭和音楽大学音楽学部作曲学科指揮コース卒業。星出豊、樋本英一の各氏に師事。下八川圭祐基金、昭和音楽大学同協会留学生奨学金を得、イタリア国立ミラノ・ヴェルディ音楽院、シエナ・キジアーナ音楽院で学ぶ。帰国後は小澤征爾、広上淳一、チョン・ミュンファン、G・カレラ等著名な指揮者の下、新国立劇場、藤原歌劇団、東京二期会、サイトウキネンフェスティバル等で副指揮、合唱指揮を務める。2005年バルトーク国際オペラ指揮者コンクール（ルーマニア）第1位、2007年ルイージ・マンチネッリ国際オペラ指揮者コンクール（イタリア）第2位を獲得。2009年、第1回香川県文化芸術新人賞を受賞。これまでに日本フィルハーモニー交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、群馬交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢、大阪交響楽団、広島交響楽団等、国内の主要オーケストラを指揮。



ヴァイオリン ハイック・カザジャン *Haik Kazazyan*

[2015年チャイコフスキー国際コンクール3位]

アルメニア生まれ。グネーシン音楽学校卒業後、チャイコフスキー記念国立モスクワ音楽院・同大学院を優秀な成績で修了。チャイコフスキーコンクールはじめ、ロン＝ティボー国際コンクール第3位及び聴衆賞（2005年）、イサンユン国際コンクール第1位及びイサンユン賞（2007年）エネスコ国際コンクール第2位 [一位なし]（2011年）、第一回ベルリン国際音楽コンクール ヴァイオリン部門 優勝（2017年）等、数々の国際コンクールで上位入賞。マリインスキー管弦楽団、ロイヤルスコティッシュナショナル管弦楽団等の著名楽団、ゲルギエフ、アシュケナージ等著名指揮者とも多数共演。モスクワフィルハーモニーソリスト。母校チャイコフスキー記念国立モスクワ音楽院の教師として後進の指導も行う。香川にて2013,2015,2016年に個人リサイタル公演を行い好評を博した。



コンサートマスター 福崎至佐子 *Hisako Fukuzaki*

東京芸術大学音楽学部器楽科卒業。ヴァイオリンを故 神崎初美、故 巖本眞理、故 岩崎洋三、ポヤン・レチュエフ、徳永二男に、室内楽を故 ルイ・グレイラーの各氏に師事。日本フィルハーモニー交響楽団を経て1972年、新日本フィルハーモニー交響楽団アシスタントコンサートマスターに就任。コンサートマスターのルイ・グレイラー氏と弦楽四重奏を組みTV、FM東京、CM、映画音楽、レコーディングに活躍する。1985年、高松に帰郷し、ゴールドブレインドコンサート、四国二期会オペラ、四国学院大学メサイア演奏会などでコンサートマスターをつとめる。現在、高松大学名誉教授。かがわジュニア・フィルハーモニックオーケストラ（KJO）音楽監督。高松交響楽団常任コンサートマスター。新日本フィルハーモニー交響楽団団友。日本演奏連盟会員。日本クラシック音楽コンクール・全四国音楽コンクール・山陽学生音楽コンクール等審査員。平成13年度「香川県教育文化功労者表彰」、第42回「四国新聞文化賞」、平成16年度「香川県文化功労者表彰」受賞、第67回「山陽新聞賞（文化功労）」受賞。平成21年度地域文化功労者文部科学大臣賞受賞。第20回（2011年）第23回（2014年）日本クラシック音楽協会優秀指導者賞受賞。2016年福山音楽コンクール「優秀指導者」受賞。

管弦楽 高松交響楽団 *Takamatsu Symphony Orchestra*



1951（昭和26）年8月、故 緒方益岡氏が県内の有志を募って創立。同年11月香川県公会堂において第1回定期演奏会を開催し、高松に初めてオーケストラの灯を燈す。爾來、半世紀以上に亘る活動を続け、2016年に創立65周年を迎えた。これまで110回を超える定期演奏会をはじめ、県内外での特別演奏会、青少年を対象にした音楽教室の実施、香川県県民ホール開館20周年記念オペラ「蝶々夫人」全幕公演（2008年）、サンポートホール高松開館5周年記念「カルミナ・ブラーナ（バレエ付き）」公演（2009年）をはじめ、オペラ・バレエ等の他団体や地元音楽家との共演など地域に深く根ざした幅広い活動を積み重ねている。2001年に迎えた創立50周年を機に新たな半世紀に向けた取り組みとして、高松団員を中心に新たに編成された「コレギウム・ムジクム高松」、「高松オペラシティ・オーケストラ」などの多面的なオーケストラ活動を展開している。さらには2001年より香川県の主催事業となった「かがわジュニア・フィルハーモニックオーケストラ（KJO）」、2003年1月に設立された「丸亀シティフィルハーモニックオーケストラ（MCO）」への演奏・運営面での全面協力など、地域音楽文化の核ともいえる重要な役割を担う香川のマスター・オーケストラとして様々な取り組みを行っている。1987年、地方文化の発展に大きく貢献した功績から音楽団体として四国で初めての「地域文化功労者表彰」を文部大臣より受賞。2008年、香川県より栄えある第1回「文化芸術選奨」を受賞。現在、オーケストラの団員数は、約150名。